



心の奥底にある自分の原点

園長 三輪 治彦

前回の巻頭では自分が未来に描きたいデザインや、おそらく…ずっと変わらないであろう自分の抱負（漢字一文字）、つまり「想い」を掲載しましたが、今回は現在の仕事（障害者福祉）に就き、休日等で取組むようになつた活動の経緯、つまり自分の「原点」について掲載します。

そもそもスポーツしか取り柄のなかつた自分は、中学の頃から体育教師になることが夢で、スポーツを続けながら、大学では教育学部の保健体育科に在籍をして、運も味方につけていたのか、一步ずつですが夢に近づき、ゴールまで辿り着く道を歩いていました。

ところが、大学2年生の夏、ある雑誌を眺めていると、1枚の記事が目に留まり、言葉には表現できない衝撃が自分に大きな変化を齎したのです。

そこには、隻腕メジャーリーガー『ジム・アボット』のことが書かれていたのです。投手としては87勝と決して驚くような数字ではないのですが、彼は幼いころから右手（右腕）がないというハンディキャップを乗り越え、大活躍した選手なのです。

では、どのように彼が隻腕で野球をしていたのかと言うと、巧みにグラブを持ち替えて、左手のみで投球・捕球・送球の一連の動作（グラブスイッチ）を凄い速さで行い、それは普通のピッチャーがゴロを処理する時間と全く変わらなかつたそうです。

この記事を読んだとき、障害があつて

もトップに立てるという勇気を、障害のある人たちだけでなく、障害のない人たちにも与え、また、野球以外の面でも大きな影響を与えていると感じたことで、なぜ日本には障害者スポーツの世界にではなく、普通にトップ選手が存在しないのかと疑問を抱き、存在しないのであれば自分が育てようと心が動いたことを今でも覚えています。

それだけでなく、彼のピッチャーとしての実力（本質）に目を向けてないで、右手（右腕）がないことだけに拘っているのが不思議で、もつと彼に好きなことをさせたいという両親の気持ちや、彼の意志に目を向け、「子どもの頃に野球を教えようとして庭に連れ出した父親」の勇気や、「忘れてはいけないことは、僕たちの障害は、あくまでも他の人の目から見ての障害と言っている本人」の言葉に、心がザワザワしことも覚えています。

あの頃から数十年が経過して、いまは選手を育てるという想いは叶っていませんが、いつも『ジム・アボット』の存在が心の奥底にあることで、カタチは違いますが、いろんなスポーツを障害のある人たちが経験して、いろんなチャンネルを創り、みんなの成長に繋がつていけば最高かなと感じています。

子どもみたいな話なのかもしませんが、この記事は今でも大事に残してあります。

